



オランダ獅子頭



養魚池の清掃

日本一の金魚を育てる。

玉名郡長洲町

松井 巖さん(60歳) ミユキさん(60歳)
一也さん(36歳) 英 子さん(36歳)
三紀子さん(13歳) 奈歩子さん(9歳)

誰しも子供の頃、親に手をひかれて夏まつりに出かけ、金魚すくいをした覚えがあるだろう。



また昭和四十年頃まで見か
りには、夏の
でもあった。
風物詩

玉名郡長洲町は、金魚の日本三大産地の一つである。関東や関西、北海道、沖縄からも技術を学びに来る。

原産地の中国から日本に金魚が入ってきたのは一五〇二年(室町時代末期)。一六〇〇年代(安土桃山時代)にはすでに長洲町で金魚の養殖が行われていた。
そして明治十年、寺本末吉氏が長洲町内の池に発生するミジンコ(プランクトンの一種)による稚魚の養殖に成功し、本格的な金魚の大量生産の時代が訪れた。
オランダ獅子頭という品種の改良

に成功した松井貞一さんの息子さんにあたる松井巖さんのお宅に伺った。巖さんは三代目だ。尋常小学校の頃から家業の金魚づくりを手伝っていた。子供を育てる以上に苦労があるというが、各種の品評会で優れた成績を残している。特に昭和二十七



年の県品評会では、十三種の審査がある中で十種にわたって一位を独占した。

月に一度セリ市が催され業者や愛好家が賑わうが、金魚すくい用として出荷されるのは、四月にふ化して生後百日から百二十日くらいのもので、エサは配合飼料があるが、生後一週間くらいは、ミジンコを与えなければ育たない。昔は荒尾や大牟田、柳川あたりまで探しに出かけたが、今では町が管理するゼーナギと呼ばれるミジンコの養殖池があり、稚魚の飼料として極めて効果的なミジンコが獲れる。長洲が金魚の町となった最大の要因は、ここにあるのだ。

また飼育槽の水も常に入れかえねばならない。今でこそポンプになったが、かつては各家に二、三個あった井戸を利用して、この水上げ作業だけで一日千五百回くらいもやったというから、大変な重労働であった。梅雨期には、池の浸水や増水による水の流出を防ぐため、夜遅くまで働く。さらにシラサギやゴイサギ、ネコなどによる被害を防ぎ、病気の早期発見に努める。巖さんが今でも忘れないのは、全国の品評会を間近に控え、出品用のランチュウを百匹ほど一夜にして亡くしたことだ。ポンプの故障による水質の悪化が原因だった。



さんに言わせれば、金魚づくり

は水づくりが基本だという。葉緑素の入った水をつくることに苦心を重ねる。この水が金魚の色彩に影響するからである。色彩が美しく、泳ぎが優雅で、全体に丸味を帯び、尾のあたりの見事な金魚は、年に数十匹しかつけない。巖さんの経験に学び、自らの研究を重ねて日本一の金魚をつくりたいと、一也さんは金魚づくりに傾ける情熱を語ってくれた。

一也さんには二人の娘さんがいるが、三紀子さんは大の動物好き。将来は獣医をしながら金魚の飼育もしたいと言う。両親も感心するくらいに熱心に金魚の飼育を手伝っている。



ゼーナギでミジンコ獲りの巖さん